

オルガノン § 183～203

§ 183 最初のレメディがもはやそれ以上働かなくなったら、現状の病状を記録し、それに基づいて次のレメディを見つければよい。

そのレメディは今の状態にまさに適したものであり、症状の数も増え、症状像としてより完全になっているはずであるから。

§ 184 これを回復するまで続けること。

§ 185 局所的＝外部の病気は、それだけで存在しているわけではない。

§ 186 外傷などの局部的症状に外科的処置をするのは必要。

§ 187 しかし些細な傷から始まる症状の中には、内的な原因によるものもある。それに対して、局部的治療だけで済まして来たのがこれまでの医学である。

§ 188 これまでの医学では、これらは他の部分とは全く無関係に生じるとされている。これは通常医学の有害で危険な大愚の一つである。

§ 189 しかし外傷なしに起こる表面的な症状は必ず内的な原因があるはずである。

§ 190 外傷によらない外的な症状は内部から全体的に治療する必要がある。つまりレメディが必要になる。

§ 191 適切なレメディはしばしば最も外的な症状にも変化を引き起こす。そしてその後、その人全体の健康の回復をもたらす。

§ 192 局所的症状だけでなく、全体的症状を調べてレメディを選ぶこと。

§ 193 局所的な症状であっても他の部分の病気とも関わっている。それらは「部分と全体」として分別不可能である。ただ全体像のなかで際立っているだけである。

§ 194 外傷によらない外的な症状に対して外用薬は役に立たない。しかし適切なレメディによっても治癒しない局所的な急性病は休眠していたソーラが突然燃え上がったのである。このソーラは慢性病として展開したのだ。

§ 195 このような時は残存する症状と以前の習慣的な病的状態に対して、抗ソーラの治療が必要となる。(慢性病論を参照せよ)

§ 196 正しいレメディなら外用薬としても使用できると考えるかもしれない。

§ 197 しかし、もし外用によって外的な症状が消え去ると本当に病が根絶したのかどうかを判断できなくなる危険がある。

§ 198 局所的な明確な症状がなくなると特徴的な症状像を描き出せなくなる。だから、局所的症状のみにレメディを適用することも避けなければならない。

§ 199 最も私たちを明確に導いてくれるのは外的な局所症状なのだから、それらがなくなるとレメディを選択するのが困難になる。

§ 200 局所症状が残っていたら治癒が終わっていないことを示す。残っていないなら、病気からの回復が達成されたことになる。よって局所症状は非常に重要である。

§ 201 VF は局所的症状を作ることによって内的病気を和らげる対応をとることがあるが、それは本質的治癒には至らないので、内的な病は徐々に悪化するし、ますます治癒しにくくなる。

§ 202 局所症状のみを根絶させれば表面的には治癒されたように見えるが、実は病気は内側へ向かい、病はより一層威力を増す。

§ 203 しかし一般的な治療は表面的で、すべて内側へ向かわせるものになってしまっている。こうした破壊的行為がすべての無数の慢性病を生み出して来た。